



三重県総合文化センター情報誌



おかげさまで、  
開館20周年。

「ありがとう」そして  
これからも「よろしく」



インタビュー

# Robert Campbell

ロバート キャンベル

みえアカデミックセミナー2014オープニング ロバート キャンベル講演会  
「日本文学からみえるこの国の未来」

Vol.104

2014

6 7 8

イベントカレンダー  
2014年6月～8月

三重県総合文化センター  
主催事業のお知らせ

テレビ番組でもおなじみの東京大学大学院教授、ロバート キャンベルさん。美しい日本語、ユーモアあふれる穏やかな語り口で、私たちが知らない日本の魅力を伝えてくださいます。幅広いご活躍は、こだわりのとらわれず、様々なことを「面白い」と受け止めるお人柄にあるようです。

## ——そもそも日本に興味を持たれ、日本文学の研究をライフワークにされたきっかけは？

一つの決定的な必然性や出会いはないんです。長い時間の中で、できなかったことを一つ一つ学び、人との出会いを重ねながら、日本の、特に文学の研究分野に行きついたということですね。他にも色々なことをやっていたんですが、面白くても続かなかったことや自然になくなっていったものもあり、削ぎ落とされた結果が、今やっている仕事です。

## ——異文化に触れる環境で育ったのですか？

ニューヨークのブルックリンで育ちました。家族、学校、教会といったコミュニティは同質の集団ですが、物心ついた時から、一歩外に出れば、言葉も宗教も肌の色も違う人たちがたくさんいる環境でした。小さい時から、違いを読み解いたり、感じたりすることを、刷りこまれたと思います。

14歳のころは、パリに住んでいました。思春期になると、「自分は何なのか、人と違うところは何か」と感じます。言葉や感覚が異なる人たちが周りにいることは、大きかったんですね。パリには北アフリカなど旧植民地からの移民が多い。周りにいた雑多な人たち、私もそうですけど、その雑多な人間のあり方ってどういうものか、無意識に見よう、理解しようとしたと思うんです。

## ——そのような中で、「日本」との出会いがあったのですか？

高校生のころ、色々な課外活動の一つでダンスをしていました。当時はサンフランシスコに住んでいたのですが、ダンスサーを使うビジュアル系のバンドが流行っていて、仲良くしていたユニットとツアーに出かけたりしました。学問はしないで、芸能の中で生きている人たち。価値観も、使っている言葉や感覚も私とは違うのですが、その中で日本的なものを知りました。映画、デザインやスタイル、日本のこういうところが面白いなって。

例えば、70年代のモデル山口小夜子さんの広

告。日本的な伝統的なテイストが入っていて、シャープでモダンで、高校生の僕らには新鮮だった。こういう一つ一つが、大学に入った時、日本語を学ぶことへとつながっていったのかもしれない。

## ——ダンスとは意外です。「面白いこと」を色々されていらしたんですね。今も、大学での文学の研究や教鞭にとどまらず、情報番組やクイズ番組のゲストまで幅広く仕事をされています。

ジャンルで選り好みはしないですね。一応節度はあります。そこで取り上げられることについて、何か一つでも自分が言えること、独自の立場やスタンスがあるかどうか大事です。

## ——震災復興では、瓦礫を活かした土壌に故郷の木を植樹し、森の再生を願う「森の長城プロジェクト」に参加されていますか？

はい、何か役に立つなら、「何ができる」というわけではないのですが、自分の色んな仕事を通して発信することはできると思っています。

仕事や活動をする時は、気持ちよくその場にいられるかどうか考えます。どんな職場でも仕事でも、そこでなされていることを信じていければ、豊かなものが引き出されると思います。

## ——お忙しい日々、心がけていることはありますか？

直前に準備をすることは好きじゃないですね。少し余裕を持って、フランス語で「faire le vide (フェールル ヴィッド)」っていう表現がありますけど、本番の一手手前でちょっと真空状態をつくる。フランスにいた時、ごく普通のおばさんが教えてくれました。自分が臨めるところまで準備して蓋をする。その間に他の仕事に飛び込めることが、楽しみでもあったりします。

もう一つは、映画監督のウッディ アレンのインタビュー記事にあったのですが、「7割は自分の体をそこに運んでいくこと。現場に行くことが7割ぐらい」って。自分の身体がそこにあることで、7割ぐらいの成功が決まる。そう考えるとラクになりますね。準備はするけれど、行けばなんとかなることも忘れないようにしています。

## ——ご専門は文学。本の魅力を教えてください。

本は、最強の逃げ場だと思うんですね。辛いことや、理屈で考えても解決できない自分の性格や

## 文学はなだらかな階段を降りていくようなもの。

人の付き合い方から、ちょっと離れることができる。それにお金がかからない(笑)。読書は自由にどこでもできて、時間を費やせば費やすほど、何かを感じとったり学んだりできる。子どもたちには、特に大切なものだと思います。

もう一つ、本は自分ができないことをさせてくれます。私の専門は19世紀の江戸から明治の日本ですが、本であれば、時空も国籍もこえて、誰でも自由にその時代の江戸に行けるんですね。

## ——文学の醍醐味は？

例えば、上田秋成の『雨月物語』には、「菊花の約(きつかのちぎり)」というお話があります。戦国時代が舞台で、義兄弟の契りを交わした兄が、弟との約束を守るため、自決をして靈魂となって戻ってくる。すごくショッキングで、現代の目から見れば荒唐無稽ですよ。でも、読んでるうちに納得するんです。やっぱり、ずっと読み継がれている優れた作品ですね。

現代語訳でも人物の気持ちや自然に対する驚きを追体験できますが、原文で読むと、秋成が書いた重層的なものまで感じられ、より深く味わえる。さらに江戸時代の版本は1頁に12行しかなくて、ゆっくりと読むことでリアリティーが増し、もう一つ奥にいける。文学はなだらかな階段を降りていくようなもの。時間をかけて深く飛び込んで行くことが面白いし、楽しいですね。

## ——ご当地、三重県への思いをお聞かせください。

江戸文学の資料が非常に豊富ですね。日本文化全体の空気に触れるためには、三重、奈良、和歌山の辺りは大切で、もっと探検していきたいです。伊勢神宮には「神宮文庫」という素晴らしい文庫があって、九州大学の研究生の時に初めて行きました。神宮文庫の古い目録を愛読しているんですけど、面白いんですよ、すごく。お風呂の中で読んだりします。風呂の中では付箋があんまりくっつかなくて、落ちて困るんですけど(笑)。

## ——講演会では、文学の中から「今を生きる智慧」をお話いただけますか。

人間は誰でも、前に向かって進もうとするわけですね。自然でとても大切なことですが、同時に振り返ることも大切なんですね。日本文学の独特の語り、構造には、物語の中で何か目標が提示され、その目標に到達するまでの過程や、私たちはどうすべきかということを描いたものが多いです。

講演会では、日本人のあり方、日本の文化を支え続けていくものや課題を、日本文学の中からいくつもの時代と場所をクロスして打ち出したいと思います。人間にとって、「今を生きる」ということが何か、未来に向けてどういう姿勢をとっていったらよいか。現在の世の中の出来事とつなげ、皆さんと一緒に考えてみたいですね。



日本文学研究者・東京大学大学院教授。近世・近代日本文学が専門で、とくに19世紀(江戸後期～明治前半)の漢文学と、漢文学と関連の深い文芸ジャンル、芸術、メディア、思想などに関心を寄せている。テレビでMCやニュース・コメンテーター等をつとめる一方、新聞雑誌連載、書評、ラジオ番組出演など、さまざまなメディアで活躍中。

講演案内

みえアカデミックセミナー2014オープニング  
ロバート キャンベル講演会  
「日本文学からみえるこの国の未来」  
平成26年7月6日(日)  
15:00～16:30(14:15開場)  
三重県文化会館 中ホール  
【申込方法】 事前申込制・先着順 【受講料】 無料  
託児あり/予約制(0歳から就学前まで1人/1,000円・先着20名)  
【申込・問合せ先】  
三重県生涯学習センター TEL059-233-1151  
URL <http://www.center-mie.or.jp/manabi/>